朗読 GEN 第3回定期公演

妹尾 河童

少年H

山川 方夫

夏の葬列

2005年
7月16日(土) 18時30分開演
7月17日(日) 13時開演
シアトリカル應典院

朗読 GEN に入って
一緒に朗読を学びませんか！

全くの初心者も、少し習ったのでもう少し深めてみたいと思っておられる方も、ぜひ一度見学に来てください。きっと楽しさがわかります。
朗読劇の舞台に立ちたい方も、スタッフとして活躍して下さる方も歓迎します。

お問い合わせは・・・・・
秋山（TEL＆FAX 0742-48-8688）
または 辻本（yumi-sab@hcc6.bai.ne.jp）

ごあいさつ

本日はお忙しい中、朗読GEN第3回定期公演にご来場いただきまして誠にありがとうございます。

戦後60年にあたる今年、これからも平和であるために、忘れてはいけないことを伝えたい、そんな思いで考えた企画です。

何も知らされないまま戦争に巻き込まれ、平凡な日常が壊され、突然、命を奪われる恐ろしさ、また、赤紙1枚で、人を殺しにいかなければならない理不尽さに怒りと、哀しみ、いえ言葉にならない思いが心に溢れます。

小沢昭一氏がインタビューに答えて「戦争ってものはなってからじゃ駄目。なりそうなときでも駄目。なりそうな気配の時にストップしないと。」と言っておられます。軍国少年だったからこそ、16歳での終戦は、強烈な体験として残ったことでしょう。

朗読劇という演劇でもなく、ドラマ・リーディングでもないスタイルでの表現の難しさを、公演ごとに感じています。でもこれからも果敢に挑戦していきたいと思っています。どうか皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

キャスト

「生ましめんかな」

朗読……秋山他７名

「夏の葬列」

彼……垣内　浩子
少年時代の彼・葬列の子供……秋山　多佳
ヒロ子さん……辻本　由美
語り……田中　章恵
　　清水　光恵
男たち……木村　幸子
　　久米裕喜代

［少年H］

H……秋山　多佳
父、盛夫……田中　章恵
母、敏子……辻本　由美
赤盤の兄ちゃん……清水　光恵
木型屋の兄ちゃん・Hの中学同級生、滝村
Hの中学先輩、杉田……垣内　浩子
国民学校校長
Hの友達、森脇君……内川　玲子
Hの友達、イッチャン
炭屋のおっちゃん　太田　淑子
洋服店客、柴田・新聞社記者宮田・畑先生
うどん屋のおばちゃん……久米裕喜代
シゲさん・八百屋のおばさん
映画館のお姉さん……木村　幸子
近所のおばさん

スタッフ

構成演出	秋山 多佳	制　作	丹原 祐子
舞台監督	堀田　誠	イラスト・デザイン	桂　瑞子
照　明	加藤 直子	記　録	小島 知光
音　響	西角 秀紀		

作品解説

生ましめんかな

原爆投下直後、旧広島貯金局の地下室で、産婦人科の女性が産気づく。その時私が生ませてあげましょうと言った産婆さんは背中一面と、左腕の肘まで焼けただれていた重傷者だった。この出産の様子を人づてに聞いた作者が詩にまとめた。生き地獄をさまよう人々の中で、新しい生命が誕生したのである。

夏の葬列

主人公の彼は、普通のサラリーマンである。大学を出て就職し、何年かが経っている。出張帰りの彼は、戦争の末期に疎開児童として過ごした、海に近いある小さな町に立ち寄る。あてもなく歩くうち喪服を着た人々の行列に出会う。その時、彼の心に一気に戦争中のある出来事がよみがえるのである。

夏の強く明るい日差しが、一瞬にかげるようなその心の動きとはうらはらに葬列は淡々と彼の前を行き過ぎてゆく。

「新潮」創刊100周年記念として編集された「名短編」に選ばれた38編に入った秀作である。作者は青春の激情や奔放な感情をそのままには描かない。心におしとどめ、厳しく耐えて生きる主人公のあり方が印象的である。

少年H

神戸の町の小さな洋服屋に生まれたH少年、本名は肇だが、母親が、セーターの胸に、名前を編み込んだため「エッチ」と言うあだ名で呼ばれるようになる。父、盛夫は貧しい洋服職人だが、仕事柄外国人との付き合いもあり、世の中の動きを敏感に察知しながらも時勢に流されない知性と、思慮深さを持った人間である。母、敏子は熱心なクリスチャンで、家族全員がその影響で洗礼を受けた。戦時中はクリスチャンへの弾圧もあったが、近所の人達は敏子の正直で親切な性格を愛して、差別するようなことはなかった。

小学校3年生のHが大好きなうどん屋の兄ちゃんは、思想犯として特高に捕まり、戦争はさらに広がってゆく。治安維持法による思想統制、言論への弾圧も激しくなり、報道されないことも多くなる。

徴兵検査に合格したものは、俗に言う赤紙で否応なく戦争にかり出され近所の木型屋の兄ちゃんも出征していく。

Hが生まれた時には、既に日本は中国と戦争状態にあり、中学3年で終戦を迎えるまで、家族とともに必死で生き抜いてゆく姿が描かれている。H少年の目に映ったその当時の人々の暮らしが、生き生きと、何だかおかしくなってしまう、ユーモラスなシーンも交えて伝わってくる。

作者紹介

栗原貞子（くりはら・さだこ）

「行動する原爆詩人」と呼ばれる。今年92歳で亡くなった栗原さんは自らの被爆体験を語るのみならず、戦争の加害者でもあったことを心に刻み、反戦運動に一生をかけた方である。

栗原さんの深く、強い「戦争は絶対におこしてはならない」という思いの底には、今回取り上げたこの詩が象徴するような多くの出来事があったのではないだろうか。

山川芳夫（やまかわ・まさお）

1930年、東京生まれ。慶応大學仏文科卒。在学中の文学部の機関誌に処女作「バンドの休暇」を発表。'54年から「三田文学」の編集者として江藤淳ら多くの新人を発掘する。「その1年」や「海岸公園」など短編集をまとめ、清新な感覚と文章力が高く評価される。'58年「演技の果て」が芥川賞候補となって以来、何度も候補に挙げられ、将来を嘱望されたが、1965年に交通事故で死去。

妹尾河童（せのお・かっぱ）

1930年（昭和5年）、神戸生まれ。
独学で舞台美術を修め、'54年「トスカ」で舞台デビュー。以来、演劇、オペラ、バレエ、ミュージカルなどの舞台美術を始め、テレビ美術などの映像デザインの分野においても活躍中の、現代日本を代表する舞台美術家。“凝り性”のエッセイストとしても知られ、「覗いた」シリーズ他、「河童のスケッチブック」などがある。小説「少年H」では'97年「毎日出版文化賞・特別賞」を受賞。

当時の暮らし

●国家総動員法　1938（昭13）
政府が議会にはかることなく、自由に物資をとりそろえることができ、国民を働かせることができる法律。これにより人々の生活に必要な物資が不足。特に大砲や軍艦をつくるのに欠かせない金属類は家の中から消えて、穴のあいた鍋や釜も修理して使うこととなる。木製バケツや陶製なべが発売される。

●配給制　1939（昭14）
物不足による物価の値上がりを防ぐために、必要物資を割り当てる配給制を取り入れた。翌年の4月より米、みそ、しょうゆ、砂糖、油、塩など10品目が切符がないと買えなくなる。8月には「ぜいたくは敵だ」の立看板1500枚が東京市内に立てられる。学生の長髪、女性のパーマ禁止となる。

●昭和恐慌
1930年、不景気により都市では、労働者が多数失業し、農村では豊作と重なって米の価格が急落し、一家心中や娘の身売りなどが続出した。

●徴兵検査
当時の日本は国民の兵役が義務づけられていた。学生を除いたすべての男子が20歳の夏、兵隊になるための検査を受けねばならなかった。合格すると3年間軍人として服務する。その後任を解かれても召集令状（赤紙と呼ばれた）がくれば軍隊に戻らなければならない。検査で甲種合格になった者は大変な名誉とされたがそれは体格もよく兵隊として国のために奉公できると考えられたからである。

当時の空襲の状況

昭和の歴史・このとき、こんなことが……

昭　二・一九二七　中国山東省へ出兵する
昭　三・一九二八　関東軍、帳作琳を爆殺する
　　治安維持法が改正される
昭　六・一九三一　満州事変おこる
　　十五年戦争（日中戦争）始まる
昭　七・一九三二　満州国建国される
　　〈ドイツ総選挙でナチスが第一党となる〉
昭　八・一九三三　国際連盟から脱退する
　　満州国の承認は四十二対一で認められず各国から非難をあびて日本は脱退した
昭一二・一九三七　日中全面戦争に突入する
　　日本軍、南京を占領する
昭一三・一九三八　国家総動員法が公布される
　　〈勤労動員はじまる〉
昭一四・一九三九　第二次世界大戦はじまる
　　〈ドイツ軍ポーランドに進撃開始〉
昭一五・一九四〇　日独伊三国軍事同盟結ばれる
　　〈キリスト教への圧迫強まる〉
　　〈全国に隣組制度がしかれる〉
　　〈たばこの名前が日本語に変わる。チェリー→桜〉
昭一六・一九四一　東條英機内閣が成立する
　　日本軍、ハワイ真珠湾を奇襲攻撃する
　　〈大平洋戦争がはじまる〉
　　〈小学校を国民学校に改める〉
　　〈毎月二回肉なし日がもうけられる〉
昭一七・一九四二　日本軍シンガポールを占領する
　　ミッドウェー海戦に敗れ戦局が不利となる
　　〈日本滞留のキリスト教宣教師が強制収容される〉
昭一八・一九四三　文部省出陣学徒壮行会を挙行する
　　〈野球用語の英語、禁止される。ストライク→よし〉
昭一九・一九四四　海軍が人間魚雷を開発する
　　初めて東京が爆撃される
昭二〇・一九四五　東京大空襲・死傷者十二万人、焼失二十三万戸、米軍、沖縄慶良間に上陸。
　　この戦闘中日本軍による沖縄県民虐殺と住民への自決の強要が多数おきる
　　ドイツ無条件降伏する
　　沖縄で負傷兵を看護していた女子生徒が多数集団自決においこまれる。
　　連合国が対日「ポツダム宣言」を発表するが、日本政府はポツダム宣言黙殺、戦争邁進と発表する
八／六　広島に原子爆弾が投下される
八／九　長崎に原子爆弾が投下される
八／一四　日本はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏する
八／一五　戦争終結の詔書が放送される